

## 1. 新センター長の挨拶



加野 芳正

この度、上杉前理事の後を受けて生涯学習教育研究センター長に着任しました。このセンターに関しては、四国地区の社会教育主事講習の担当、学長の一井先生がセンター長時代の将来構想の策定など、何かと縁がありました。今と違って、大学開放センターと呼ばれていた時代は全国に3大学しかなく、行政やマスコミなどが主催する生涯学習プログラムは貧弱でしたので、センターは存在感がありました。また、大学の地域連携という点ではシンボリック的存在でした。しかし、今日では地域社会との連携といえは「産学連携」が中心となっています。センターをめぐる社会環境はすっかり変わりました。

「地域に根ざす」という香川大学の目標からすれば、当センターの役割は大きなものがあります。そして、地域社会における生涯学習の振興という任務を果たすには、先生方のご協力が不可欠です。これまで同様、センターへのご支援をどうか宜しくお願いします。

## 2. 公開講座紹介(第三回)～現代的課題を学ぶ～

大学が提供する公開講座として相応しいテーマは何かということは、繰り返し問われることであります。本号では、日本社会が直面する現代的課題に対応することを目的に、連合法務研究科および医学部により最新の研究成果を踏まえつつ開講された二つの講座をご紹介します。

### (1) 模擬裁判を体験する

#### <開講までの経緯>

司法改革の一環として、市民が刑事裁判に参加する「裁判員制度」が2009年5月までに実施されるよう、必要な法整備が行われました。市民に対する法教育の必要性はかつてない高まりを見せています。司法改革の一環として法科大学院も各地で設立されておりますが、香川大学でも、日本で唯一の連合法務研究科を愛媛大学と開設し、新しい法曹養成制度の一翼を担っています。

今回、連合法務研究科の草鹿晋一助教授による提案で、市民の司法制度理解を深めるための試みとして、本講座が開講されることになりました。草鹿先生はご専門(裁判制度、民事訴訟法)を活かして学内外でご活躍ですが、ご自身だけでなく、刑事訴訟法がご専門の田淵浩二教授、現役の弁護士でもある吉成務教授および大学院生とともに周到な準備のもと講座に臨んでいただきました。

【平成17年11月19日(土)、連合法務研究科模擬法廷教室】



## <講座風景>

講座前半は法律や裁判についての基礎理解を図るもので、静かな熱気に包まれながら進行しました。具体的なシナリオが提示され、受講者自らが役割を演じる段階に入るとその熱気は見える形で高揚し、事前の打ち合わせなど、時間を忘れて取り組んでいました。いざ、本番です。検察と弁護士、裁判長、被告人、受講者からは多少の照れと戸惑いが感じられたものの、それぞれがしっかりと役割を果たしていました。核心をつく質問、誘導的な尋問、情緒的な反論等、振り返るととても学習の深まりそうな模擬裁判になりました。講座修了後の受講者の安堵と満足感に包まれた笑顔が印象的でした。

## (2) 病気になるしない知恵と工夫～医療現場から最新のメッセージ～



本講座は石田俊彦教授ほか、計6名の医学部の先生方のご協力により、オムニバス形式で実施されました。癌や糖尿病、うつ病予防など、健康に関する地域の人々の関心は高く、43名の受講生の方が講師の話を中心に聞いていた姿が印象的でした。

なお、公開講座は香川大学内だけで実施しているわけではありません。高松市と連携し、年に2-3講座を片原町にある高松市生涯学習センター（通称まなびCAN）で開催しております。（平成17年度は本講座と、経済学部山田仁一郎助教授らによる「明るいシニアライフ戦略～国際比較から考える制度・家族・個人～」との2講座。）

【平成17年11月11日（金）、まなびCAN】 当センターでは、来年度以降も、今回ご紹介したような社会の動きに対応した講座、地域の人々のニーズに応える講座を企画していきたいと思っております。

## 3. 第27回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会

2005年11月25日（金）、26日（土）の二日間、和歌山県のコガノイベイホテルにて第27回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会が開催され、当センターからは専任教員山本珠美が出席しました（当番校：和歌山大学生涯学習教育研究センター）。

初日は和歌山大学長小田章氏の挨拶、文部科学省生涯学習政策局政策課地域づくり支援室室長補佐佐藤誠氏による記念講演、滋賀大学生涯学習教育研究センター長住岡英毅氏の基調講演「地方国立大学における生涯学習系センターの役割」の後、出席者の意見交換がなされました。また二日目には「生涯学習系センターを起点とした地域と大学の関係づくり～和歌山大学生涯学習教育研究センターの場合～」をテーマとしたシンポジウムが開催されました。

協議会では昨年度に引き続き、公開講座に積極的に取り組んで下さる教員に対していかなるインセンティブで応えるかが関心の一つでした。多くの大学は検討中ということでしたが、北海道大学や鹿児島大学が受講料収入の一定割合を担当教員の所属する部局へ配分する方式を、また福島大学では1時間あたり3,000円を講座準備費という名目で研究費として上乗せ配分を行う方式を取るなど、動きの見られる大学もありました。

その他、関心を集めた事例として、琉球大学と民間旅行代理店との連携による滞在型観光と連続講座を組み合わせた新企画、「シニア短期留学プログラム」が挙げられます。午前中は琉球大学教員による沖縄の文化・自然・歴史等に係る講義、午後は観光という構成で、2週間にわたって実施したそうです。参加者の満足度も非常に高く、また採算的にも成功だったという報告でした。旧来の自治体との連携とは違う新たな事例として注目を集めていました。

## 4.“公開講座”考(第二回)

### (1) アンケート結果から見る公開講座(その2)

前号ではアンケートの中から単純集計の結果をいくつか取り出してお紹介しました。本号では、クロス集計の結果を抜粋してお紹介しましょう。

前号で受講生の満足度は高いものの、「満足できた」と「ある程度満足できた」の違いはどうして生じるのだろうか、ということを書きました。このあたりのことを探るために受講生の属性とクロスしてみます。すると、表1のように概して年代が上がるほど「満足できた」の割合が下がる傾向にあることがわかります。また、職業別では、表2のように主婦や自営業、公務員の方の「満足できた」の割合が比較的高いことに比べ、会社員や無職の方の場合は「ある程度満足できた」の方が高くなっていることがわかります。グラフは載せていませんが、男女別では女性の方が男性より「満足できた」の割合がやや高く、公開講座の参加回数別では、回数が増えるほど「満足できた」より「ある程度満足できた」の割合が若干高くなる傾向にあります。

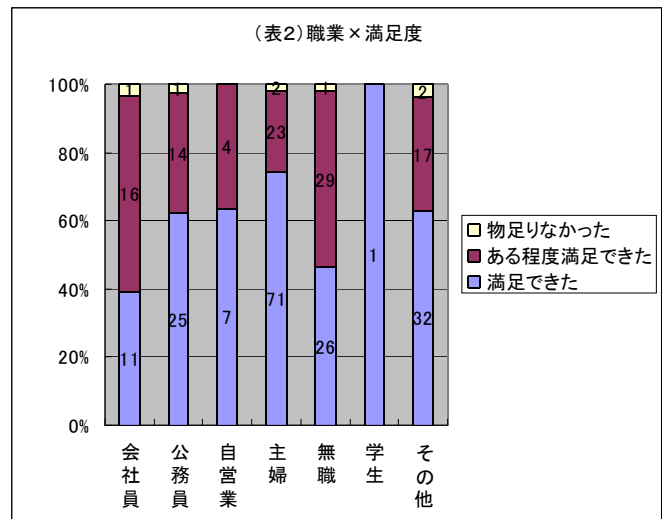
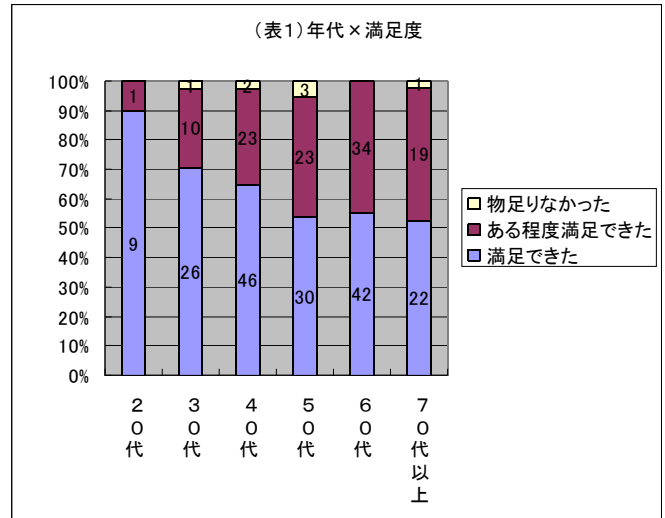
これは属性によって公開講座に求めるものが異なるがゆえの結果かと思われます。すべての受講生の満足度をより一層高めるとするのはなかなか難しいでしょう。しかし、ここで一つだけヒントを挙げましょう。実は、アンケートにはしばしば「**文字が小さすぎて高齢者に優しくない。**」との意見が寄せられているのです！この程度のことであれば、来年度からでもすぐに改善できるのではないのでしょうか。文字の大きさというのは1つの例にすぎませんが、公開講座の場合、担当教員が**高齢の学習者に配慮する姿勢を持つ**ことは大切なことと思われます。

次号では自由記入欄に書かれた受講生の生の声から公開講座の課題について考えることとします。(文責:山本珠美)

### (2) 成人教育理論の視点から公開講座を考える(その2)

アメリカの成人教育学者M. ノールズのアンドラゴジー論(andalogy)を紹介しつつ、成人教育のあり方について考えてみます。まず、ノールズのごく簡単な経歴ですが、1913年生まれ、21歳でハーバード大学を卒業し、しばらく青年教育の現場に関わっています。YMCAを中心に成人教育の実践に携わりながら、シカゴ大学で修士号、博士号を取得し、48歳よりボストン大学教授として教育研究活動に従事しています。成人教育の領域で実践から理論へ、理論から実践へ、精力的に著述活動を行いました。

ノールズの理論の特徴のひとつに、成人性の発達と学習との関係を精緻に記したことがあげられます。別の言い方をすると、成人教育を「教授から学習へ」とパラダイムシフトさせたといえるでしょうか。その背後には、成人性が成熟に向かうにつれ、人は自律性が高まり、より能動的になり、客観的な判断力をもつようになり、広く社会に関心を向けるようになり、自己受容的になることなどがあげられます。他にも数



個の項目をあげながら、学ぶ主体である成人のとらえ直しをしました。これら成人性の成熟を前提とするならば、自己主導的学習(self-directed learning)を支援することこそが成人教育の中心に据えられ、教師の役割は援助や情報提供に重きが置かれることになります。

しかし、すべての成人が成熟した成人性をもちあわせているのか、あらゆる学習内容が自己主導的に進められるのか、という疑問も同時に湧いてきます。それについてノールズは、子どもを対象とした教育学であるペダゴジー論(pedagogy)と対照させながら、最も効果的な学習方法を選択することこそが重要であるとしています。換言すれば、公開講座であれ、社会人学生の授業であれ、私たちは常に最適な教育内容および方法を用い、学生に向き合う必要があるということでしょう。(文責:清國祐二)

## 5. 平成18年度公開講座募集

すでにメールでお伝えしております通り、12月1日より来年度の公開講座の募集が始まっております。開講ご希望の方は、**平成18年1月20日(金)まで**に、配布いたしました計画書をセンター事務室までご提出下さい。

公開講座は香川大学の教育面での地域貢献事業です。講義だけでなく実習・実技なども積極的に取り入れた、魅力的な企画をお待ちしております。

 申込先: センター事務室 内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp

 問合せ先: センター専任教員 清國祐二 内線1272 kiyokuni@cc.kagawa-u.ac.jp


## 6. 『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第11号原稿募集

当センターでは毎年度『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』を発行しております。生涯学習を研究する本学教員、センターが主催する講座等を担当した本学教員、また、センターが主催する講座等を担当した学外講師で編集委員会が認めた者であれば、どなたでも投稿することができます。

すでにメールでお伝えしております通り、投稿ご希望の方は、所属、氏名、論文仮タイトルを**平成18年1月20日(金)まで**にセンター事務室または下記担当教員までご連絡下さい。

原稿締切は**平成18年2月28日(火)**です。多くの方のご投稿をお待ちしております。

 申込先: センター事務室 内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp

 問合せ先: センター専任教員 山本珠美 内線1271 yamamoto@cc.kagawa-u.ac.jp

### センター雑感

◆住居の安全と子どもの安全が脅かされている。◆住居は専門ではないが、コンクリートで覆い尽くされた鉄筋の建物で日々生活している。そこに何本の鉄筋が使用されているか、どれほどの安全性が確保されているのか、あまり疑ったことがない。そこには暗黙の信頼が存在しているからだ。◆子どもについては専門領域に近接している。子どもは地域の中でこそよき社会人となる、というのが信念である。なぜなら、地域は子どもたちを育む優しく厳しい場だからだ。そこに子どもの命を奪う大人はいない。◆しかし、その安全神話は崩れ去った。少しのほころびであっても、崩れ落ちるのは早い。◆安全と安心を取り戻すには、地道な信頼関係の再構築しかなさそうである。さて、どこから手を付けようか。

◆(清國)